

工芸概論 1

# 「工芸とは？」

工芸概論 1

## 工芸とは

### 「工芸」 = 「工」 + 「芸」

「工」 = 匠・工業の工であり、「巧みな技」を意味  
 「芸」 = 技能・才能をあらわす言葉

「工芸」の用語は中国の唐代にはじまり、巧みに物を作る才能とされた。

広辞苑  
 ①工作に関する芸術 ②製造に係わる技芸  
 ③工業と芸術を兼ね合わせたもの

実用国語辞典  
 「工業生産品に美的な技術やデザインをほどこすこと。その生産品」

工芸概論 1

海外

## 工芸 = クラフト

クラフトのもともとの意味は「技術」で、その後、技の巧みさから生み出される手工芸品または「工芸」を指すようになった。

「工芸（クラフト）」とよばれるようになった歴史はそれほど古いものではなく、19世紀末のヨーロッパではじまった「アーツ・アンド・クラフツ運動」（美術工芸運動）を発端として、広く世界に流布して行く。

それ以前は、アーティスト（芸術家）とアルチザン（職人）に分けられ、アルチザンはアーティストよりかなり低い地位にあったと考えられる。

工芸概論 1

### 日本で、「工芸」の用語を使用したのは、明治になってから。

明治政府がはじめて正式に参加したのはウィーン万博（1873年）で新しい日本を全世界にアピールしなければならないという使命があった。

日本では近代工業が未発達であるため、西洋の模倣でしかない機械製品よりも、日本的で精巧な美術工芸品を中心に展覧した。

ウィーン万博を契機に日本の工芸品を売ることによって外貨獲得に貢献。




図之部内口へ所品列本日館不協實覽博國維

工芸概論 1

工芸とは

**芸術的な意匠 + 機能的な美しさを備えた工作物のこと**

工芸において念頭に置く価値観は

**「用と美」**

- 用（用途）を重視すると機能重視となり、見た目には魅力に欠くことがある。
- 美（美しさ）を重視すると合理的な使用に支障をきたすことがある。

工芸概論 1

工芸概論のスケジュール（安藤担当分）

月	日	回	授業テーマ	内容
4	14	1	ヨーロッパの工芸運動	アーツアンドクラフツ運動以降の美術工芸運動
	21	2	琳派と工芸	琳派の作家たちの作品紹介と工芸との関連
	28	3	工芸の感じ方	近・現代の工芸作家と作品を概観する
5	12	4	民藝とは	民藝運動と日本民藝館の収蔵品紹介
	19	5	工芸デザインの世界	若手作家を招いてのトークショー

工芸概論 1

**ヨーロッパの近代工芸**

工芸概論 1

**近代デザイン史年表（1880～1920）**

Timeline highlights:

- 1880s: アーツ・アンド・クラフツ運動 (Arts and Crafts Movement)
- 1890s: ユーゲントシュティル (Jugendstil)
- 1919: バウハウス (Bauhaus)

工芸概論 1

アーツ・アンド・クラフツ

工芸概論 1

近代デザイン史年表 (1880~1920)

工芸概論 1



「アーツ・アンド・クラフツ運動」と「ウィリアム・モリス」

イギリスの詩人、思想家、工芸家であるウィリアム・モリス (1834-1896年) が主導した美術工芸運動。

ヴィクトリア朝の時代、産業革命の結果として大量生産による安価で粗悪な商品があふれる。モリスはこうした状況を批判して、中世の手仕事に帰り、生活と芸術を統一することを主張。

モリス商会 (1861) を設立し、装飾されたインテリア製品を製作。

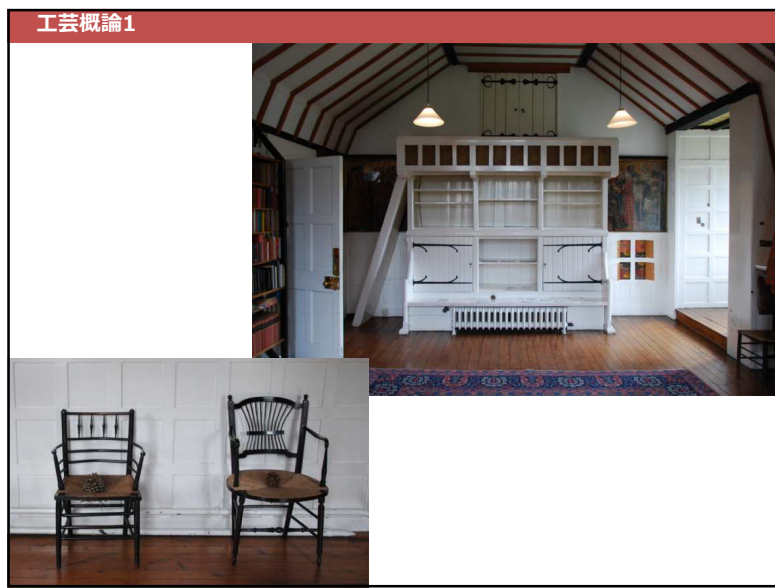
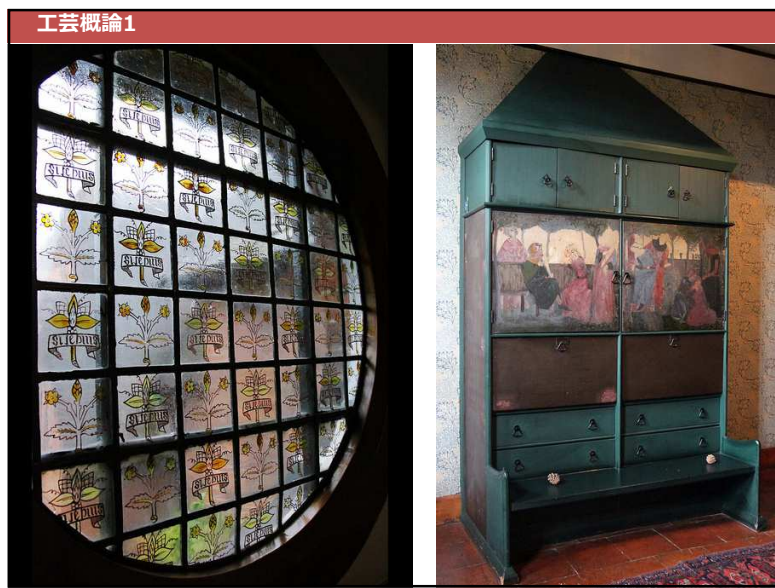
生活と芸術を一致させようとしたモリスの思想は、アール・ヌーヴォーなどの美術運動にその影響が見られる。

工芸概論 1

ウィリアム・モリスの作品







工芸概論 1

**グラスゴー派**

チャールズ・レニー・マッキントッシュ  
スコットランドの建築家、デザイナー、画家  
アーツ・アンド・クラフツ運動の推進者

ラダーバックチェア    アーガイルアームチェア    グラスゴーのティールーム

工芸概論 1

**ユーゲント・シュティル**



工芸概論 1

### 近代デザイン史年表 (1880~1920)

Timeline details: 70, 80, 90, 1900, 10, 20. Key figures and movements include: ウィリアム・モリス (1861-1896), アー・アンド・クラフツ運動 (1884), スカンジナビア・デザイン (1905), デザイン産業協会の設立 (DIA) (1905), ドイツ工作連盟 [DWB] (1907), ユーゲント・シュティール (1896), ヴァルター・グロピウス (1867-1929), モホリ・ナジ (1895-1946), ヘルベルト・バイヤー (1863-1935), イタリア未来派 (1909), ジョー・ボグナー (1869-1929), シュテッティン (1896), エル・リシツキ (1880-1941), アル・コルビュジエ (1893-1965), アル・ヌーヴォー (1890), アール・デコ (1913), ヴィーン分離派 (1907), ヴィーン工芸 (1903).

工芸概論 1

### 「ユーゲント・シュティール」

1896年に刊行された美術雑誌『ユーゲント』に代表されるドイツ語圏の世紀末美術の傾向を指す。「青春様式」と表記されることもある。

「構成と装飾の一致」を理念とし、美や快楽と実用性を融合させることが目的。

美術・工芸に見られる手法は、動植物や女性のシルエットなどをモチーフとし、柔らかい曲線美を特徴とする。

雑誌『ユーゲント』表紙

マスタード入れ

工芸概論 1

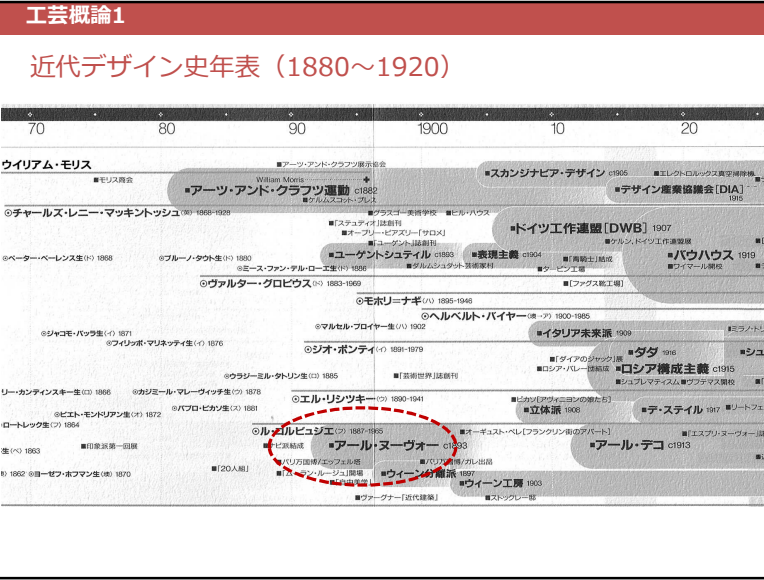
### 醸造所の看板

### リキユールジャグ

### コーヒーカップ/ソーサー

工芸概論 1

### アール・ヌーヴォー



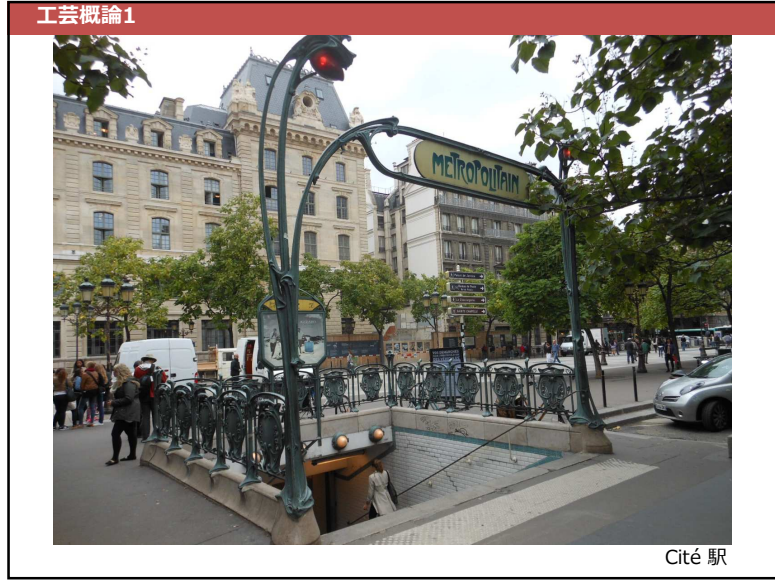
工芸概論 1

### 「アール・ヌーヴォー」

19世紀末にヨーロッパで花開いた新しい装飾美術の傾向のこと。有機的な自由曲線の組み合わせ、鉄やガラスといった素材が特徴。

アール・ヌーヴォーはフランス語で「新しい芸術」の意味。

エクトール・ギマール  
カステル・ベランジェの門扉 (左)  
メトロ入口のガラス屋根 (上)









**工芸概論 1**

**「ウィーン工房」**

20世紀始めにオーストリアの建築家ヨーゼフ・ホフマンによって設立された工房。



アーツ・アンド・クラフツ運動の影響を受けたが、アール・ヌーヴォーのような優雅な曲線でなく、直線的な幾何学の構成が特徴。




ヨーゼフ・ホフマン「クープス ソファ」



ヨーゼフ・ホフマン「ストックレー邸」

**工芸概論 1**



コロマン・モーザー「アームチェア」



ヨーゼフ・ホフマン「ティーポット」



ヨーゼフ・ホフマン「カトラリー」

**工芸概論 1**



オットー・ブルツァー「ガラスペンケース」



コロマン・モーザー「花器」

ウィーンのバックハウゼン社では、日本の型紙の文様を参考に、コロマン・モーザーがデザインしたテキスタイルを現在でも販売。

